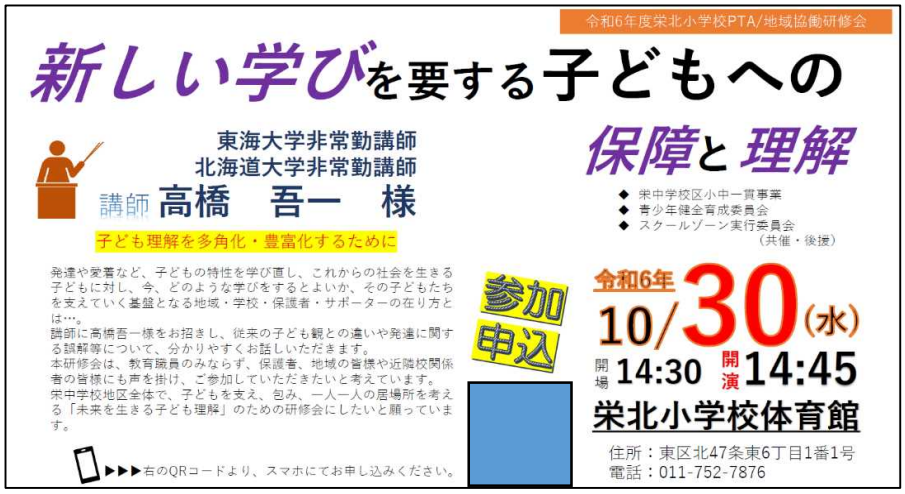
栄中学校グループ
コミュニティ・スクール
カウントダウン通信

栄　中学校
栄北小学校
栄東小学校
栄緑小学校

NO. 3 （R7. 1. 17）

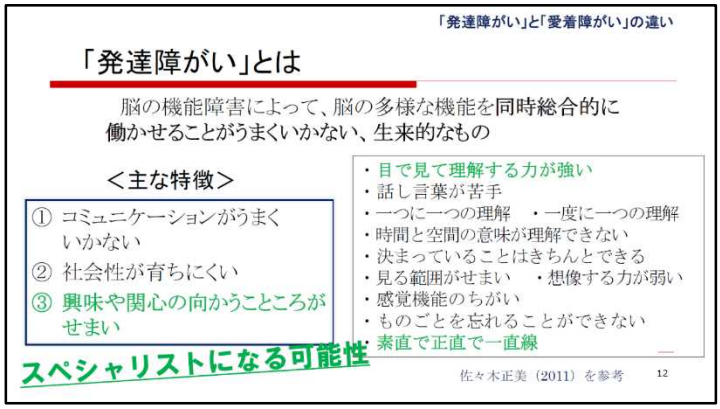
地域協働研修会報告

去る令和６年１０月３０日（水）に栄中学校区の保護者、教職員、地域関係者等を対象に研修会を行いました。これは、次年度コミュニティ・スクールの導入に向けて準備をしている４校が、学びの場も共有しようということで行ったものです。今回は、栄北小学校で企画していた研修会に他の３校も加えていただく形で実施しました。



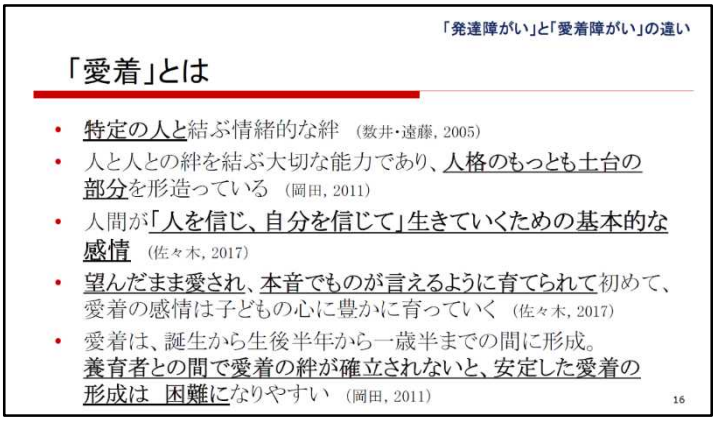
講師は、東海大学教職課程非常勤講師の高橋吾一氏でした。高橋氏は元中学校教師でもあり学校現場の様子も知っている方です。演題は「新しい学びを要する子どもへの保障と理解」（上記チラシ参照）で、話の中心は「子ども理解」の内容でした。

まずは、「『気になる子、心配な子ども』の増加とその背景」についてお話いただきました。『気になる子、心配な子ども』の具体として、「発達障がい」「愛着障がい」を挙げていらっしゃいました。高橋氏の説明によると、「発達障がい」は、脳の機能障害によって、脳の多様な機能を同時統合的に働かせることがうまくできない、生来的なものであり、主な特徴は右記のスライドのようなところだということでした。一方、「愛着障がい」は後天的な、子どもと関わる特定の人との関係性の障がいなのだそうです。



2022 年の文部科学省の調査「通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒に関する調査」では、「全国の公立小中学校の通常学級に発達障がいの可能性のある児童生徒は 8. 8%」という結果が示されました。この件について、「本当に発達障がいは増えているのか？」という疑問のもと「発達障がい」と「愛着障がい」の類似性について話されていました。

「愛着障がい」について知るためには、まず、「愛着」について知る必要があります。右記のスライドのように様々な先生方の「愛着」の捉えを示していただきました。



続いて、愛着形成により「３つの基地機能」が育まれるということを説明していただきました。それが、

下記のスライドに示された機能です。

①②の機能不全が、「愛着障がい」に

愛着形成により育まれる「3つの基地機能」

米澤（2019）を参考

① 安全基地機能・・・恐怖、不安というようなネガティブな感情から「守る」機能。

② 安心基地機能・・・感情的なあたたかさ、愛情の要素を含んだ機能。「その人といると落ち着く、ほっとする、癒される、気が楽になるというポジティブな感情」をも生む機能。

③ 探索基地機能・・・ひとりで経験した行動・経験を、「安全・安心基地である養育者」に報告し、それを共有することで、そのとき感じた、嬉しい、楽しい等の「ポジティブな感情」はより増大し、怖い、悲しい等の「ネガティブな感情」はより減少する。この機能があるから、子どもは、様々な意欲を育み、嫌な経験をしても、それを乗り越えていける。

後天的な、子どもと関わる特定の人との、関係性の障がい

17

この基地機能の機能不全が「愛着障がい」につながるということでした。具体的にどのような行動がみられるのかというと、下記の２枚のスライドに示した通りです。

「発達障がい」と「愛着障がい」の違い

「安全・安心基地機能の問題」によって見られる行動

米澤（2019）を参考

- 多動　対人忌避　高い所に登る　物を投げる
- 酷いケガをした場合、泣かない、痛がらない
- 不適切な行動を自分がしたと絶対に認めない自己防衛（してないとウソをついたり大泣きしたりする）
- 物を手で触り口に触れさせる
- 足や身体を床に接触させるために靴や靴下を脱ぐ
- 寝転ぶ、這い回る　過剰な身体接触
- 注目されたいアピール行動
- 愛情試し行動　愛情要求エスカレート現象

19

「愛着障がい」の話の最後は「愛着障がいを克服するために」という話題で締めくくりました。

以下が、大事だとされる内容です。これらは、養育者の対応にも教職員の対応にも当てはまる内容ですので、意識していきたいものです。

「発達障がい」と「愛着障がい」の違い

「探索基地機能」の問題によって見られる行動

米澤（2019）を参考

- 自己評価が低い　（成功体験を報告してポジティブな感情を増加させられなかったため）
  - 「自己否定タイプ」：意欲のない自信喪失状態
  - 「自己高揚タイプ」：誰かを注意、指摘して、あるいはモノを与えたりして、自己の優位性を渇望する。
- 相手への反抗的な攻撃　（そこで生じた嫌な感情を紛らわせる）
- 理由もなく他者を攻撃　（他で生じた嫌な感情を紛らわせる）

20

「安全・安心基地」となるための５つの条件

① 安全感の保障…一緒にいても傷つけられることがない。

② 感受性・共感性…何を感じ、何を求めているかを察し、それに共感すること。それを察して、さりげなく手を差し伸べることも。

③ 応答性…相手が求めているときに、応じてあげること。それは、いざというときに「相談できる」「守ってもらえる」という安心感に。でも、**過干渉**は×。

④ 安定性…できるだけ一貫した対応をとること。

⑤ 何でも話せること…相手が隠しごとをしたり、遠慮したりせずに、心に抱えていることをさらけだすことができること。

岡田（2011）を参考

続いて「教師の人手不足と日本の教職の特徴」、「なぜ日本の社会は孤立化が進む？～【家庭・学校が教える価値規範】」に関わるお話をいただき、最後に、「『お互いさま』と支え合える共生社会へ」という見出しで、東京大学先端科学技術研究センターの准教授の熊谷氏の話を紹介してくださいました。話の内容は以下の通りです。

「自立」とは、依存しなくなることだと思われがちです。でも、そうではありません。「依存先を増やしていくこと」こそが、自立なのです。これは障害の有無にかかわらず、すべての人に通じる普遍的なことだと、私は思います。

他者や社会に頼っていいことを子どもに伝えるためには、保護者自身もいろんな人やものに頼ることができていなければなりません。保護者が頼る姿を見て、子どもは、「自分1人で抱え込まなくていいんだ」ということをあらためて学ぶでしょう。

それはきっと、子どもにとって大きな財産になると思います。

私たち大人が「助けて」と言えること、困っている人を助ける行動をすることが、子どもたちが生きやすい社会にすることにつながるということを伝えていただきました。

学校・保護者・地域が協働で子どもたちを育てることを目指したコミュニティ・スクール。私たち栄中学校区は、次年度からスタートさせるために準備しています。今回の研修会で学んだことを生かしながら子どもたちが伸び伸びと学ぶことができる中学校を目指していきたいと思います。